

西と東 北と南 (三)

加藤淳平

(三)

當時東西關係とともに、南北關係なる語もあり。世界の國々を、北なるは、經濟發展の進みたる國々、世界的には「發展國」、英語の日本語譯にては、「先進國」と言ふが常なりき。對して南の國々、「發展途上國」と譯せらる。北の「先進國」に對應すれば、「後進國」ならむも、そは侮蔑語の氣味有りて、忌避せらる。

日本にて常用せられたる「先進國」なる語も、實は國際的には、忌避せられたるも、我が國にては、第二次世界大戰の敗戦を経験せる、多くの國民が心情に、格別の満足感を與へたる故か、頻用せられたり。

當時の國際社會に、世界を北の「發展國」、日本人の言へる「先進國」と、南の「發展途上國」、今言ふ「途上國」とに分ち、北の「豊かなる」國は、南の「貧しき」國を、經濟的に「援助」する責任を有すとの思考、歐米の知識層を中心に廣まれり。

斯くて北と南の、所謂「南北關係」とて、西ヨーロッパはアフリカの、米國は中南米の、發展のため、「援助」を行ふべしとの言説、廣く行はるるに至る。

こは、英國と並び、世界有数の植民地保有國たるフランスの、世界各地の植民地が獨立を志向する趨勢に抗し、自國のアフリカ植民地維持を、國際的に正當化して、實質的植民地維持の政策と、そがための經費支出に對し、世界の人々の是認・稱揚を、獲得せむと圖る狡智より、發したる發想なりしかど、國際的影響力強き此の國、國聯内部等に、巧妙にこの發想を植ゑ付け、廣むるに成功せり。

斯くて世界の「北」の、「豊かなる」國々、地理的に近き「途上國」を、發展せしめんがために、「援助」供與の義務と責任を負ふとするが、國際社會の標準的理解となれり。

國際的發想力弱き我が日本、唯々、フランスが狡智に、引き廻されたるのみなりき。逸早くフランスに同調せる米國、政治的・經濟的發展の可能性乏しく、妙味尠かりし東南アジアが發展と、そがための「援助」の責任を、自らが從屬國たりし日本に押し付けたり。

されど戰時中の短期間の軍事占領により、現地の人々らに、親近感を覺えたる日本人ら、對東南アジア「援助」の、自らが使命なるを感じ、遂に現下に見るが如き、此の地域が發展を成就せり。そは我らが同胞らの、眞摯なる努力と獻身の成果ならざりしや。アフリカ・中南米が現況と比べ、刮目すべき成果ならざりしや。

(令和四年十月二十二日受附)